

「向き合い、考え、議論する英語」へ

—BIG DIPPERの目指す地平—

石川 慎一郎

1. 「新しい学力」と向き合う

指導要領の改訂によって、高校英語にも数々の変更が予定されています(コミュニケーション英語から英語コミュニケーションへ、4技能から5領域へ、4観点評価から3観点評価へ、中高3,000語から小中高5,000語へ、等々)。ただ、あわせて重要なのは、今回の改訂で、全教科を通貫する形で、Society 5.0に対応する「新しい学力」観が強く打ち出されたことです。「主体的・対話的で深い学び」や「社会に開かれた教育課程」、道徳で示された「答えが一つではない課題に子供たちが道徳的に向き合い、考え、議論する」教育は、英語を含むすべての教科が目指すべき共通のベクトルとなっています。

2. 「新しい学力」と高校英語

筆者が関わっている *BIG DIPPER English Communication* (以下 *BD*) は、「新しい学力」を見据え、現代の高校生に「答えが一つではない課題に《英語で》向き合い、考え、議論」してもらえる教材作りを目指しています。

一般に、教科書では、分量の制約もあって、文句のつきにくい美談や建前論を題材にしがちです。しかし、環境や人権が大切だというだけの文章だと、反論や異論の余地がほとんどなく、生徒に考え、議論させることは難しくなります。

そこで、*BD* は、扱う題材について、常に「もう一つの声」を盛り込むこととしました。美談には批判の、批判には擁護の論点を示すことで、生徒は対立する複数の意見の中から自分の立場を選び取るよう促されます。高校生がこれから出ていく現代の社会では、様々な価値観や利害が複雑に渦巻いており、そうした中で、ファクトを冷静に分析し、対話を通して自身の立場を決めることは「新しい学力」のまさに要諦と言えるでしょう。

ここでは、新課程版の *BD* より「アップサイク

ル」の単元を紹介したいと思います。アップサイクルはリサイクルの進化形とされ、古タイヤをバッグに加工して販売するなど、廃棄物を単に再利用するのではなく、付加価値をつけて新たな商品に転換することを言います。近年、欧米などでは、環境への意識の高さを示すアイテムとして人気を博し、高額品もよく売れています。

こうしたアップサイクルを教科書で紹介する場合、通例は、目を引く事例を列挙し、その意義を説明し、環境保護の重要性を指摘して終わりとしがちです。しかし、それだけでは議論は深まらないでしょう。そこで、単元末に、様々な人々による SNS 上のコメントを集めて示すことにしました。そこには「人と違うものが欲しいのでぜひ買いたい」や「SDGsの観点から協力したい」といった肯定意見とともに、「製造コストが高くて売りたい」という店主の否定的な声も入っています。実際、加工作業に必要なエネルギー量を考えれば、アップサイクルは環境保護に反するという見方もありえます。ここで教師が意見を問えば、生徒たちは、対立する意見のはざままで、自分自身の立場を探り始めるはずで

BD は、表面的には読みやすいテキストであっても、小さな「ひっかかり」を必ず用意しています。そこに焦点を当てれば、生徒たちは習った英語を使い、ペアやグループで意見交換を行うことで、あるいは意見を書いて読み合うことで、テキスト・友人・自己との対話を重ねていきます。英語を学ぶ授業は、同時に、「答えが一つではない課題」に英語で向き合うアクティブラーニングの授業になることでしょう。*BD* が「向き合い、考え、議論する英語」授業の一助になることを願っています。

(神戸大学 教授)

BIG DIPPER English Communication

代表著者